

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：SRS株式会社

定 価：一部30円

2012年10月20日

第 354 号

この子らの

終ついにの棲家すまかは？

理事長 稲松 義人

全日本手をつなぐ育成会の前会長の副島さんが会議で浜松に来られるという事で、浜松手をつなぐ育成会の小出会長よりお誘いがあり、私を含め浜松インクルージョン研究会のメンバー数名で夕食をともしました。副島氏は、地元の大学を拠点に関係する人たちが立場を超えて集まり、研究協議を継続してきた浜松での実践は参考になる点がある評価して下さった。

今回の懇親会の話題は、知的障がいのある人たちの「終の棲家」についてだった。

新しく示されている制度では、現在の自立支援法にあるグループホームとケアホームは統合され、要介護者にはホームヘルパーのような外部からの介護者を入れるという方向性が打ち出されているそうだ。そうなるとグループホームやケアホームは、住居としての意味合いが大きくなる。地域に暮らすという意味では「普通の暮らし」に近くなるとも考えられるが、外部から派遣されるヘルパーでは、言葉で伝えることなど自己主張の苦手な知的障がいの人たちにとっては、本人の意向を大切にしたい生活ができるか心配だという

意見もあるようだ。これまでのような定員50名100名という施設に戻りたいとは思わないまでも、小規模の施設であればそのほうが安心なのではないかというのである。高齢者福祉で進められている「小規模多機能型」という介護施設のイメージだろうか。ここでいう「施設」とは、施設のどんな側面をイメージしているのだろうか。

私は、「施設」は何らかの成果を求めて利用する建物だと思っている。それは、医療であったり、教育であったり、リハビリであったり、介護である場合もあるだろう。それが必要な期間、まさしく「利用」するのが施設ではないだろうか。

それと違って「住まい」は、たとえ賃貸住宅であっても、ふつう利用するとは言わない。話題になった終の棲家（ホーム）も、単に建物（ハウス）のことではない。ホームは、自分自身の居場所、安心できる場所であろう。安心できるのは、安心できる人間関係の中でのことではないかと思う。地域に一人暮らしのお年寄りがいる。心配だから、息子夫婦と一緒に住もうと言っても、長く住んできた自分の家から離れない。そこにこそ自分の居場所があると感じるからだ。たとえ一人暮らしでも、亡くなったご主人との思い出、自分の生きてきた記憶の中にそれを感じているのではないだろうか。安心をどう作っていくか。知的ハン

ディがあり支援を必要とする人が、親御さんと一緒に生活できないとしても自分自身が安心できる場所、人間関係、日常生活の選択肢はいくつかある。

終の棲家というと、建物としての住居を思い浮かべてしまうが、どこかで「場所につく猫、人につく犬」をいう話を聞いたことがある。イヌ型人間は引越しても仲良しの友人たちと一緒に住む方が安心なのかもしれない。ネコ型人間は、両親が亡くなったとしても、自分の家に住む方が落ちつくのかも知れない。終の棲家は、きっと一様ではなく、どんな人にとっても、それぞれが安心できる親しい人との距離間をもって、地域（関係の中）に生きることができるとはならないだろう。

今度はどんな制度が示されるのか、社会福祉事業を経営する立場としては大いに気になるのだが、制度の変更に合わせて事業方針を変えるのは性に合わない。支援の対象としている人たちのことを考え、どんな事業をしたのか。そのために示された新たな制度をどう活用できるだろうか、と考える方が健全なような気がしている。人はたとえ重い障がいがあったとしても、安心して住める場所、生き生きと日中活動（仕事）ができる場所、地域の人たちと交流できる場所が必要だろうと思っっている。それは、障がいがないとされている私たちにとってもまったく同じことなのだろうと思う。

## 支援施設の 高齢化を考える

障がいを持つ人たちの生活拠点として整備された入所施設の多くは昭和40年代～50年代に建てられました。当時は若者だった人達も年を重ね、中高年から高齢期を迎えています。

全国的に課題となっている入所施設の高齢化・重度化。三方原スクエア・支援センターわかぎの看護師に現状と今後について報告してもらいました。

### 障がいを持つ方たちの 高齢化を考える

三方原スクエア 看護師

小森 裕子

#### 利用者の現状

現在三方原スクエアには、児童部21名、成人部30名、ケアホーム17名、合計68名の利用者の方が入所されています。学齢児は小学校1年生～高等部3年生までの14名ですが、成人の54名の方々の年齢層は幅が広く、下は20歳から、上は61歳までの方が生活しており、平均年齢は44・2歳です。

皆さん入所されている期間は様々ですが、中には2歳の頃から入所されている方もいます。平均在園年数は32・2年です。障害程度区分の平均は5・7と重度の方がほとんどであり、脳性

麻痺や自閉症、ダウン症などの基礎疾患を抱えています。また、てんかんなどの慢性疾患のある方も多くいらっしゃいます。

三方原スクエアの利用者の皆さんは日中活動の中で毎日元気に散歩に出かけていますが、この数年で変化が見られてきました。今まで普通に歩いていた散歩も、足の上がりが悪く、小さな段差でつまずいたり、長い距離を歩けなくなっている方が増えています。やはり年齢が上がるにつれて運動機能も少しずつ低下しているのだと日々感じます。

また、嚥下機能の低下も切実な問題です。食事中にうまく飲み込めなくてむせてしまう事も比較的多くの利用者さんに見られます。飲み込みが悪くなると食物が誤って気管に入り込み、誤嚥性肺炎を引き起こすことがあります。年齢が上がるに従って唾液の分泌量も徐々に減るため、口の中の清潔を保つことが難しくなります。そのため歯周病などの問題も出てきます。飲み込みの悪い方は、口の中が不潔になることよって肺炎を引き起こす確率がとても高くなるので、細心の注意が必要で

#### 変化の気づき

高齢になると様々な機能の低下が見られてきます。これは障害を抱えていてもそうでなくても訪れる現象です。目が見えにくくなる、耳が聞こえにく

くなる、トイレが近くなる、むせやすい、目覚めるのが早くなり深く眠れなくなくなる、物忘れや集中力の低下なども年配の方にとっては納得できるのではないのでしょうか。また、がん、心疾患、脳卒中などの成人病に繋がらないように健康診断の結果などから予防に努めるもの重要です。私たちはその老化現象を自身で受け止め、症状が出れば対処することができず、利用者さんたちは自分で訴えることができせん。そのため、支援に当たる私たち職員が利用者さんの変化にいち早く気付くようにしなければなりません。

散歩中に地面の色の変わる部分や段差などに過敏に反応するようになった利用者さんがいました。今まではなかった様子に、目が見えにくくなっているのではないかと職員が気付き、眼科に受診してみると、かなり進んだ白内障だということが分かりました。その方は手術をし、現在は視力が回復。以前のように歩くことができるようになっています。手術といってもそう簡単なものではありません。テープ類を皮膚に張られるのが苦手な利用者さんにとって点滴はかなりの苦痛になります。検査をするのにもじっとしている事が苦手な方もいます。利用者さんの体調の変化を敏感に感じ取ってくれるのはやはり現場の支援員です。病院にかからなければならぬ状態になる前に、こちらで体調の変化に気付くことも職員

の使命だと思っています。

#### 豊かな生活のために

これから三方原スクエアは本格的に高齢化の時代に入ってきます。健康面での配慮はもちろんなのですが、もう一つ大切なのはクオリティオブライフ（生活の質）です。これから迎える老年期は、今まで作業や活動を頑張ってきた分、体力は衰えても明るく楽しめる生活に変わる時期です。活動の内容も見直しの時期に来ているのかもしれない。その豊かな生活を健康で迎えるために、私たち職員は自分で訴えることができない利用者さんの日々の変化に気を配り、あらゆる方向から体調の変化を察知できるように日々努力していきたいと思えます。



E棟の皆さん

「高齢化施設を考える」

支援センターわかぎ 看護師

半田 浩久

年齢の変化

支援センターわかぎを利用されている方々で一番長い方は34年になります。利用開始当時の年齢は、上が35歳、下が15歳、利用開始当時の平均年齢は19・7歳でした。

それから34年の年月が流れ、その間に何人かの入れ替わりはありましたが、現在は最高齢が70歳、最年少が26歳、全体の平均年齢は52・1歳になります。平均年齢をみるだけでも年月の流れを感じます。

現在は40名の方が利用されています。直接支援にあたる職員が25名、看護師2名、栄養士2名（内1名は他職兼務）で支援にあたっています。



検温の様子

病気の内容

私が支援センターわかぎ（旧若樹学園）に就職させて頂いたのは20年前の平成4年でした。前看護師からの申し送りは「これから、成人病の人が増えると思うので受診が多くなるけど頑張ってください！」でした。先輩のお言葉通り、毎日受診に明け暮れる日々を送りました。内部疾患や成人病での受診もありましたが、どちらかというと、急な発熱や原因不明の体調不良、ケガなどが多かったように思います。そして、20年たった今はどうかといえますと、今は成人病ではなく生活習慣病といいますが、20年前とあまり変わっていないのではありませんかというのが正直な感想です。内部疾患を発症して、定期的に受診をしなければいけなくなった方も微増はしていますが、当時懸念したほどではないように思います。

しかし、受診の数は確実に増えていきます。「生活習慣病はそれほど増えていないのに受診の数は増えている」ということかといえますと、今まで病院知らずで過ごしてきた方々も、一年に何度か急に体調を崩し受診するということが増えています。まさしくこれが高齢化ということだと感じています。

病気の発見、受診、検査

わかぎだけではないと思いますが、ご自分の体調を言葉で上手に伝えられない方々が多いため、気が付くのに多少の時間がかかります。気が付いて病

院に行っても何をされるのか分からない不安感や恐怖心からか、ドクターの診察を受けることができない方、診察はできても検査を受けることができないという方もいます。必要性を言葉で説明してもなかなか理解して頂けないのが現実です。



歯科検診

これから…は

これからの課題を上げればきりがありませんが、高齢化は確実に進んでいます。今まで病気をしたことの無い方が病気になることもあります。突然死もあるかもしれません。みなさんいずれ最後の時を迎えることも事実です。そのことを理解したうえで、私たちは利用者の方々にどのような支援をしていけばよいのでしょうか？

今までのような、「健康管理」や、「体力の維持増進」といったあたり前

のことではなく、病気やケガで無駄に苦しい思いや痛い思い、つらい思いをしないよう、そして、老後という時間を楽しく笑って送れるような環境を提供することではないでしょうか。そのためは、職員間の連携をしっかりと行い、体調不良を早期に見つける、できるだけケガを少なくできる、というような目配りのいき届いた支援体制を作ることが大事ではないかと思えます。施設での高齢化も、一般社会の高齢化も何ら変わりがあるものではありません。日本全体の問題です。

ちよつと一言

少し前のデータですが、平成20年の「社会福祉施設等調査報告書」において、入所更生施設、入所授産施設、障害者施設入所支援の在籍者は96,940人で、そのうち17,959人が60歳以上です。

また、日本知的障害者福祉協会「平成21年度全国知的障害児者施設・事業実態調査報告書」において、入所更生、入所授産、施設入所支援利用者のうち、60歳以上の人は19・5%という結果が出ています。

5人に1人が60歳を超えていることは、障害者福祉政策にリンクしています。入所施設が増大した昭和40年代に成人期で入所し、生活を続け、高齢期を迎えている人が多いのです。

東北被災地支援レポート

南相馬での生活 9月30日(日)

支援センターわかぎ 鈴木圭子

今日で9月が終わります。南相馬での生活も残り1か月となりました。今日は、浜松の方は台風が近づいているようですが、こちらを通過するのは夜中ということで、今はまだいい天気です。つい最近まで寒かったのに、今日は暑く半袖を着て窓も全開です。窓を開けていると日曜日なので、隣の教会から讚美歌が聞こえてきます。

教会と保育園に隣接している家なので、この前、保育園の女の子に「保育園の先生なの？」と質問されました。仕事帰りでエプロン姿だったので保育園の先生と思ったのでしょうか？

小さな子だし、職場は隣の区なのでどうやって説明しようかと迷い、とりあえず「先生じゃないよ。ビーンズという所でお仕事してるんだよ」と言うと、隣にいたお母さんが「図書館にあるカフェをやっている所ですよね？」と仰り、改めてビーンズが地域に根差した施設であることを実感しました。

さて、今日は天気がいいので駅前にあるコンビニまで歩いて買い物に行きました。家から駅まで10分くらいですが、今日は近道を見つけたので、もっと早く行けました。最寄りの「原ノ町駅」きれいな駅ですが、電車は原ノ町

相馬間のみななので、出掛ける時はもっとバスを利用しているので、まだ利用したことはありません。

コンビニで地元の新聞も買いました。今日9月30日で、避難準備区域解除からちょうど1年という記事が載っていました。県内各地の環境放射能測定結果や食品の放射性物質の検査結果が載っているのを見ると、福島にいるんだなと実感しますが、しまむら、カインズホーム、コメリ、カワチなど浜松と同じ店も多く買い物には困りませんが、閉店時間が早く、買い物は週末にまとめ買いです。

スタッドレスタイヤや家庭用の小型除雪機のCMも始まり、寒くなる日も近そうです。



9月30日付け 福島民報 1面記事

※ 東北被災地支援レポートは法人ホームページに毎週更新されます。ぜひご覧下さい

日中活動室が増設されます

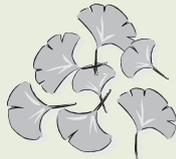
三方原スクエア・つばさ静岡

平成24年度障害者自立支援基盤整備事業の補助を受けて、三方原スクエア・つばさ静岡の2施設が日中活動室の整備を行います。三方原スクエアは施設外に拠点を置き、つばさ静岡は隣接地に活動室を整備する計画です。

補助額は2,000万円(10/10補助率)で2施設とも11月初旬から中旬にかけて入札を行い、25年3月に竣工する予定です。完成後は、作業や創作活動など様々なプログラムを行い、利用者の生活の幅が広がるを期待しています。

わかぎ秋祭りのご案内

日時 24年11月11日(日) 10時~14時30分  
ところ 支援センターわかぎ 浜松市浜北区平口5042



- ◎ 模擬店(東北うまいもん店)・イベント・野点、フットケア・フリーマーケットなど盛りだくさん
- ◎ 問合せ 支援センターわかぎ ☎ 053-587-2614

小羊学園を支える会

2012年度寄付金報告

9月受付分 88,000円(17件)  
累計 2,116,051円(154件)

小羊学園への寄付金振込み先

郵便振替口座 00800-8-107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園  
ゆうちょ銀行 089店 当座預金0107785  
口座名義 社会福祉法人小羊学園

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。小羊学園を支える会事務局(鈴木) 三方原スクエア内 ☎ 053-414-1833

【お詫び】

つのおえ 353号の郵送の際に、何名かの方に手違いから352号をお送りしたことが分かりました。事務局ではどなたのところ間違えたものが郵送されたのか把握できていません。ご迷惑をおかけしましたことを心からお詫び申し上げます。ご連絡いただければあらためて353号をお送りします。どうぞご連絡ください。

連絡先電話 053-414-1833 (三方原スクエア)

編集後記

朝夕はすっかり涼しくなりました。気温変化が激しくなると、体調管理が難しいです。どうぞ皆さまお身体ご自愛下さい。